

## ロシアのピアノズム：ワディム・サハロフ先生に聞く

安原雅之 愛知県立芸術大学音楽学部准教授（音楽学）

本稿は、2009年11月26日（木）に開催された〈2009年度愛知県立芸術大学サテライト講座：ロシアのピアノズム〉における講演の内容と、そのための準備として取材した内容を再構成したものである。この日の講座は、ソヴィエト時代の伝説的なピアニスト達による演奏を、本学客員教授であるワディム・サハロフ Vadim Sakharov 先生が所有する古い映像で鑑賞しながらサハロフ先生のお話を聞くという企画であり、筆者が案内役と通訳を務めた。取り上げられたピアニストは、以下の6名であった<sup>1</sup>。

- (1) アレクサンドル・ゴルデンヴェイゼル Aleksandr Gol'denweiser (1875-1961)
- (2) ゲンリヒ・ネイガウス Genrikh Neigaus [Heinrich Neuhaus] (1888-1964)
- (3) グリゴリー・ギンズブルグ Grigory Ginzburg (1904-1961)
- (4) レフ・オボーリン Lev Oborin (1907-1974)
- (5) スタニスラフ・ネイガウス Stanislav Neigaus (1927-1980)
- (6) エミール・ギレリス Emil Gilelis (1916-1985)

### ワディム・サハロフ先生略歴

旧ソヴィエト連邦（現アゼルバイジャン共和国）バクー生まれ。モスクワ音楽院で学ぶ。1972年、同大学院を修了した後も、モスクワ音楽院でヴェラ・ゴルスタエヴァ教授の助手を務める。共産主義政権下で、演奏活動は制限されていた。1989年、フランスに亡命。その後はザルツブルグやロッケンハウスなど、欧州の主要音楽祭に出演し、またアーノンクール、エッシェンバッハなど著名な指揮者と共演。また、ヴァイオリンのクレーメルやチェロのヨー・ヨー・マとの共演も多い。特にクレーメルとは、ピアソラの作品をいち早く取り上げて国際的なブームを巻き起こしたほか、クレーメル自身がバルト三国の若い演奏家を結集した室内楽集団「クレメラータ・バルティカ」と共演するなど、様々な形で舞台を共にしている。現在、愛知県立芸術大学音楽学部客員教授。

## 1. バクーからモスクワへ

サハロフ先生は、アゼルバイジャン共和国の首都バクーで幼年時代を過ごされた。旧ソ連時代には、モスクワ音楽院を頂点とする音楽教育のシステムがソ連全土に渡って築かれており、優秀な子供はモスクワに集められていた。サハロフ先生も、そのようなルートでバクーの音楽学校からモスクワに行くことになった。

ワディム・サハロフ（以下 VS）：私の父が音楽家で、私は5才の時にピアノを買ってもらいました。本格的に音楽の勉強をはじめたのは、6才の時です。最初は作曲家になりたいと思っていました。

当時通ったのは、私が住んでいた地区にあった普通の音楽学校です。午後1時ころに小学校が終わり、それから音楽学校へ行くのです。レッスンは1回45分で週2回ありました。学校では、ピアノの他に、ソルフェージュ、合唱、音楽史などを勉強しました。その後、1959年、私が13才の時に、バクーの中央音楽学校に進みました。私の先生は、インナ・ゲールリツェル先生と、リュドミラ・ウマンスカヤ先生でした。

社会主義の国でしたから、学費はもちろん無料です。学校では定期的に実技試験がありましたが、その時にはモスクワから先生がやって来て、審査に加わっていました。遠路モスクワから先生が来るのには、優秀な生徒を見つけるという目的がありました。私もそうしてモスクワへ行く機会を得たのです。

モスクワに行く時、私の先生は2通の推薦状を書いてくださいました。1通は、ゲンリヒ・ネイガウス先生宛で、もう1通はヤコブ・ミルシテイン Yakob Isaakovich Milstein (1911- ) 先生宛です。モスクワでは、モスクワ中央音楽学校に入学しました。この学校は、モスクワ音楽院直属の学校で、レッスンは音楽院で受けますから、この時から実質的にモスクワ音楽院で学んだということになります。

モスクワ音楽院のシステムの特徴は、“カーフェドラ”にあると思います。それぞれのカーフェドラには大きな家族のような雰囲気があり、そのような環境のなかで純粋に音楽を学ぶことができました。

## 2. カーフェドラ

カーフェドラ Кафе́дра とは、大学などの“講座”を意味するロシア語である。音楽院でも、各ファクリチェート факультет（辞書の意味では「学部」だが、日本の音楽大学の“科”にあたる）に、いくつかのカーフェドラが存在する。

1985年に出版されたモスクワ音楽院を紹介するブックレットによれば、当時のピアノ科のカーフェドラは4つあり、それぞれ次の4人の教授が主任を務めていた<sup>2</sup>。

ニコライエワ Tat'yana P. Nikolayeva (1924-93)

メルジャーノフ Viktor K. Merzhanov (1919-)

マリーニン Evgenii Malinin (1930-)

ヴラセンコ Lev N. Vlasenko (1928-)

ブックレットによれば、タチアナ・ニコライエワのカーフェドラには、ニコライエワと同じくゴルデンヴェイゼルの弟子であるバシュキロフ Dmitry A. Bashkirov (1931-) と、ギンズブルグ G. G. Ginzburg に師事したドレンスキーもいたが、そのギンズブルグはゴルデンヴェイゼルの生徒だった。つまり、このカーフェドラはゴルデンヴェイゼル派ということになる。

一方、メルジャーノフのカーフェドラにはファインベルク Samuil Y. Feinberg (1890-1962) の伝統を継承するファインベルグ派のピアニストが所属しており、教授陣には、ナタンソン V. A. Natanson やエメリヤノワ N. P. Emeryanowa らがいた。また、ゴルノスタエワ V. V. Gornostaeva とヴェデルニコフ A. I. Vedernikov らによって、ゲンリヒ・ネイガウスの伝統がこのカーフェドラに取り込まれた。

マリーニンのカーフェドラは、ネイガウスの弟子を中心に構成されていた。ナウモフ Lev N. Naumov (1925-2005)、ナセドキン Aleksei A. Nasedkin (1945-) の他、カステルスキー V. V. Kastel'skii、ギレリス E. Gilel's、ザック Ya. Zak らがいた。

そしてヴラセンコのカーフェドラでは、フリエール Yakov V. Flier (1912-77) の弟子の他に、オボーリンの教え子であったヴォスクレセンスキーがいた。1978年のチャイコフスキー・コンクールで優勝し、その後は指揮者としても活躍するプレトニョフ Mikhail V. Pletnev (1957-) は、フリエールとヴラセンコの教え子であった。また、フリエールはイグムノフ Konstantin N. Igumnov (1873-1948) の弟子であり、イグムノフの伝統を継承している。

これら4つのカーフェドラのうち、メルジャーノフ教授は今も現役で、現在は次の4名の教授がそれぞれのカーフェドラの主任となっている<sup>3</sup>。

ヴォスクレセンスキー Mikhail S. Voskresensky (1935-)

ゴルノスタエヴァ Vera V. Gornostayeva (1929-)

ドレンスキー Sergey L. Dorensky (1931-)

メルジャーノフ Viktor K. Merzhanov (1919-)

ヴォスクレセンスキー教授のカーフェドラには、ヴォスクレセンスキー教授以外に5名の教授（ヴィルサラージェ Eliso K. Virsaladze、クズネツォヴァ Elena I. Kuznetsova、ムンドヤンツ Aleksandr A. Mndoiants、ペトロフ Nikolai A. Petrov、セヴィドフ Arkadii G. Sevidov）の他、5名の助教授と5名のアシスタントが所属している。4つのなかではドレンスキー教授のカーフェドラが最も大規模で、11名の教授（アイラペチャン Yurii S. Airapetian、ジューコヴァ Ol'ga M. Zhykova、イグナチエヴァ Zinaida A. Ignat'eva、ネルセシヤン Pavel T. Nerses'ian、ペトウーホフ Mikhail S. Petukhov、ピサレフ Andrei A. Pisarev、プロトニコヴァ Irina H. Plotnikova、ピヤセツキー Valerii V. Piasetskii、リヒテル Elena R. Richter、ロシュシナ Liudmila V. Roshchina、トロップ Vladimir M. Tropp）をはじめとする総勢20名で構成されている。また、最年長のメルジャーノフ教授は、2名の教授を含む9名体制のカーフェドラとなっている。ゴルノスタエヴァ教授のカーフェドラには、計13名が名を連ねる。

師弟関係の系図をたどると、ファインベルグ派のメルジャーノフの他、ヴォスクレセンスキーのカーフェドラは、イグムノフ／フリエール～ヴラセンコ、ゴルノスタエヴァはネイガウス～マリーニン、ドレンスキーはゴルデンヴェイゼン～ニコライエフという伝統を継承していることになる。

VS: メルジャーノフ教授はもう90才くらいのはずですが、まだ現役と聞いています。高齢なので、たぶん音楽院へはたまにいらっしゃるくらいでしょう。レッスンはカーフェドラ体制で行われるので、師事する先生が忙しい場合など、他の教授や助手などがレッスンすることもあります。メルジャーノフ先生の場合も、通常は他の先生がレッスンをしているのではないのでしょうか。

カーフェドラはひとつのファミリーのようなものです。同じ系列のいろいろ

な先生にレッスンを受けることになり、カーフェドラごとのコンサートも行われます。また、カーフェドラのなかでは、教授と学生は、先生と生徒というよりも、芸術家同士の関係といった雰囲気がありました。

それは人間同士のことですから、教授の仲が悪いこともあります。しかし、カーフェドラ同士の確執のようなものはありません。あるカーフェドラ出身のピアニストが、他のカーフェドラの助手になることもあります。

私がモスクワで最初に師事したのは、ヤコブ・ミルシテイン先生 Yakov I. Mir'shtein (1911-) でした。当時のカーフェドラは、[上記の]1985年当時よりもさらにひとつ前の世代の教授たちの時代でした。ミルシテイン先生はイグムノフに学んだピアニストであり、つまり、私はイグムノフ～ヴラセンコ～ヴォスクレセンスキーによって継承されるカーフェドラに属していたということになります。

### 3. モスクワ音楽院で出会った伝説的なピアニストたち

サハロフ先生がモスクワ音楽院で学んだのは、中央音楽学校時代を含めると1962年から大学院を卒業する1972年までの10年間である。社会主義国家体制下の、今のロシアとは全く異なる環境で学び、演奏活動を行っていた。

#### (1) アレクサンドル・ゴルデンヴェイゼル



ロシアのピアニスト、ピアノ教師。モスクワ音楽院でピアノをジロティ Aleksandr I. Ziloti (1863-1945) とパブスト Paul Pabst (1854-1897) に、作曲をアレンスキーとタネーエフに師事した。1906年から61年まで、モスクワ音楽院ピアノ科教授を勤める。教え子に、カバレフスキーやベルマンなどがいる。トルストイの友人であり、トルストイについての著作もある(1922年出版)。

VS: ゴルデンヴェイゼル先生に直接お目にかかったことはありませんが、私がモスクワに行った頃も、著名なピアニスト／教師としての影響力がありました。先生は、音楽学者としての業績も豊富で、特に楽譜の校訂では多くの重要な仕事をしました。シューマンの楽譜の校訂もありましたが、特にショパンの楽譜は、私はパデレフスキ版よりも良いと思います。

面白いアネクドートがあります。ある時、生徒が試験でタネーエフのフーガを演奏しました。今でこそしばしば演奏される曲ですが、当時はそれほど知られていませんでした。その生徒が弾き終わると、先生は「ページが抜けている！」と叫んだのだそうです。どうやら、楽譜が1ページ欠けていたのを、楽譜も見えていないのに、先生だけが気づいたのです。1ページ欠けたまま演奏したというのも可笑しい話ではありますが、先生がいかに博学であったか、ということ伝えるエピソードです。

## (2) ゲンリヒ・ネイガウス



ウクライナ出身のピアニスト、ピアノ教師。著名なピアニスト、フェリックス・ブルーメンフェルトの甥で、作曲家シマノフスキの従兄弟にあたる。1904年、13才の時にドルトムントでデビュー。ウィーンで学んだ後、ロシアに帰国してサンクトペテルブルグ音楽院に入学する。卒業後、トビリシ音楽院、キエフ音楽院を経て、モスクワ音楽院教授となった。教え子に、リヒテル、ギレリス、息子のスタニスラフ、ヴィルサラーゼ、ルプーらがいる。

VS: ネイガウス先生は、私がモスクワに行った頃に音楽院に在籍していた最も著名な教授でした。私はネイガウス先生宛の推薦状も持っていたのですが、バクーという、いわば辺境の地からやってきた私は恐れをなして、ネイガウス先生には紹介状を持って訪ねることすらできませんでした。しかし、音楽院での生活に慣れると、ネイガウス先生のレッスンも見学するようになりました。モスクワ音楽院では、他の生徒のレッスンを見学することもごく普通です。有名な先生のレッスンともなれば、毎回マスタークラスのように多くの見学者が集まったものでした。

ある日のこと、私も緊張してレッスンを見学していたのですが、終了後、先生が「誰かタバコ持ってない？」と聞きました。すでに喫煙していた私は喜んで、ポケットからタバコを取り出し、先生に1本差し上げました。私は尊敬する大先生と直接話げできたばかりでなく、タバコを差し上げることができて興奮したのですが、すぐあとに、先輩たちからひどく叱られました。なぜなら、ネイガウス先生は心臓が悪く、禁煙を命じられていたからです。タバコを吸う人は他にも沢山いたのですが、そのことを知らないのは私だけだったのです。もし

かしたら、それが先生の人生最後のタバコだったかも知れません。

### (3) グリゴリー・ギンツブルグ



ロシアのピアニスト、ピアノ教師。若い頃に、ゴルデンヴェイゼルの家で、ラフマニノフ、スクリャービン、メトネルなどの演奏を聴いた。その後、モスクワ音楽院でゴルデンヴェイゼルに師事。1924年に卒業し、29年から助手、35年から教授となる。第1回ショパン・コンクール（1927）で4位入賞。

VS: ギンツブルグの演奏は、上体をほとんど動かさないスタイルです。しかし指は驚くほど自由自在に動くのです。彼の演奏のなかでも、特にリストの〈ラ・カンパネラ〉では、彼の卓越したテクニックをうかがい知ることができるでしょう。モスクワ音楽院学生のテクニックのレベルも、かなり高いものでした。ソ連出身のピアニストが海外のコンクールで入賞することは珍しいことではありませんでしたが、コンクールの場合、国内選考を通るのがとても大変でした。

私もリーズのコンクールに出場しましたが、当時はなかなか国外、特に西側に行くことはできなかつたので、とても嬉しかったです。また、メシアンなどの現代曲は、当時のソ連では認められていなかったのでおおっぴらに弾くことはできませんでしたが、コンクールで弾くことを理由に、隠さずにさらうことができたことを懐かしく思い出します。

### (4) レフ・オボーリン



ロシアのピアニスト、ピアノ教師。モスクワ音楽院で、ピアノをイグムノフに、作曲をミヤスコフスキーに師事。大学院在学中の1927年に、第1回ショパン・コンクール優勝。翌年から母校で教えるようになった。ヴァイオリニストのオイストラフと長きにわたり共演。また、チェロのクヌシェヴィツキーを加えてトリオを結成した。

チェイコフスキーを中心とするロシアのレパートリーを盛んに演奏する一方、オイストラフと共演したベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲録音は国際的に高く評価された。

現代音楽にも強い関心を示し、ハチャトゥリヤンのピアノ協奏曲など、多くの現代曲の初演を行った。教え子には、アシュケナーズらがいる。

VS: オボーリンは同じカーフェドラだったので、お世話になりました。ショパン・コンクール優勝という輝かしい経歴で、スター的存在でした。

当時も、モスクワ音楽院には世界中から若い音楽家が来て勉強していました。私はそこで多くの人と出会い、親しくなりました。日本からは野島稔さんが留学してきましたが、彼との親交は今も続いています。ルーマニアから来ていたピアニストのラドウ・ルプーや、スコットランドから来ていたチェリストのエリザベス・ウィルソンなどは、特に親しい友人です。エリザベスは、現在はショスタコーヴィチ研究者として活躍しています。

#### (5) スタニスラフ・ネイガウス



ロシアのピアニスト、ピアノ教師。1945年、モスクワ音楽院に入学し、父親のゲンリヒに師事した。大学院を1953年に卒業し、演奏活動を開始。ロマン派の作品を得意のレパートリーとした。

VS: 父親のゲンリヒ先生は恐れ多い存在でしたが、息子のスタニスラフは年齢も近く、親しくしていました。彼らは当時、文学者パステルナークの別荘に住んでいて、私もそこには何度も行きました。

当時のソ連では、物もなく、いろいろな制限のなかでの生活を強いられていましたが、私たちはひたすら音楽に明け暮れた生活を送っていました。皆、お金のことなど考える必要もなく、純粹に音楽を学んでいたのです。それも今は昔、古き良き時代のこと、と言えるかも知れません。

## (6) エミール・ギレリス



ロシアのピアニスト。オデッサの音楽学校で勉強をはじめ、12才で最初のリサイタルを行った。1931年に国内コンクール優勝。1935年から37年まで、モスクワ音楽院でゲンリヒ・ネイガウスに師事。その後、ウィーンとブリュッセルのコンクールで入賞し、注目を集めるようになった。その後、モスクワ音楽院でネイガウスの助手を務めたほか、生涯に渡って、音楽院で後進の指導にあたった。

VS: ギレリスは、私が最も尊敬するピアニストのひとりです。私が考える、ロシアのピアニズムを体現するピアニストであると思うのです。

ロシアのピアニズムの伝統で何が一番特徴的で重要かと言えば、私は“歌う”ことではないかと思います。流派によってスタイルの違いはあるとしても、“歌う”ということについては共通しています。ですから、ピアニストも声楽を学ぶべきだというのが私の持論です。

慎ましさを尊重する日本の文化のなかで育った学生のなかには、テクニックはしっかりしていても、“歌う”ことが苦手な学生もいます。しかし、そうでない学生もいます。私の教え子に、掛川くんという男子学生がいますが、彼は声楽が好きでよく伴奏をしています。そのため、彼は“歌う”ということをよくわかっていて、それが彼の演奏にも活かされているのです。彼は試験でシューベルトを演奏しましたが、忘れることができないほど素晴らしいものでした。

私は今、愛知県立芸術大学で教えていますが、学生たちにもその伝統をつたえるべく努力しているつもりです。

今回の講座では、主にカーフェドラに焦点をあてて、いろいろなお話を伺うことができた。サハロフ先生によって語られると、歴史的なピアニストたちのイメージが蘇るようであった。ソ連崩壊後はロシアにおける音楽の状況も大きく変化しているからこそ、それは貴重な体験であった。できれば今後もこの企画を続けていきたい。

[注]

1. 今回の講座で鑑賞した演奏は、以下の通り。

(1) アレクサンドル・ゴルデンヴェイゼル

ショパン：プレリュード 第13番 嬰へ長調 作品28-13

ショパン：プレリュード 第20番 ハ短調 作品28-20

(2) ゲンリヒ・ネイガウス

スクリャービン：アルバム・リーフ 作品45-1 (断片)

(3) グリゴリー・ギンズブルグ

ショパン：ワルツ 第7番 嬰ハ短調 作品64-2

リスト：ラ・カンパネラ

(4) レフ・オボーリン

チャイコフスキー：《四季》から1月「炉端にて」、3月「ひばり」、6月「舟歌」、10月「秋の歌」、11月「トロイカ」

(5) スタニスラフ・ネイガウス

ショパン：スケルツォ 第2番 変口短調 作品31

ドビュッシー：前奏曲 第2集 第5番〈ヒースの草むら〉

(6) エミール・ギレリス

ベートーヴェン：ピアノソナタ第12番 変イ長調 作品26、他

2. *Ministerstvo kul'tury SSSR. Moskovskaia Konservatoriia: Moskovskaia gosudarstvennaia dvazhdy ordena Lenina konservatoriia imeni P. I. Chaikovskogo. (Moscow, 1986): 45-46.*

3. モスクワ音楽院の組織については、同音楽院の公式ホームページに掲載されている。アドレスは下記の通り。

<http://www.mosconsv.ru/page.phtml?3022> (2010年1月1日参照)

主な参考資料

*Ministerstvo kul'tury SSSR. Moskovskaia Konservatoriia: Moskovskaia gosudarstvennaia dvazhdy ordena Lenina konservatoriia imeni P. I. Chaikovskogo. Moscow: Ministerstvo kul'tury SSSR, 1986.*

Keldysh Iu. V. *Muzykal'naia entsiklopediia. Vols. 1-6, Moscow: Sovetskaia entsiklopediia, 1973-1982.*